



雨水市民の会

会長 辰濃 和男

〒131-0032 東京都墨田区東向島 1-8-1

TEL : 03-3611-0573 FAX : 03-3611-0574

H.P : <http://www.skywater.jp/>

e-mail : office@skywater.jp

雨の視点からアジアの水危機を救う実践を！

No more tanks for war, tanks for peace!

盛況のうちに閉幕、雨水東京国際会議、延べ2,100人が参加

8月1日から7日まで墨田区役所とすみだ環境ふれあい館で開催された雨水東京国際会議は、海外から13カ国48名を含め、延べ2,100人が参加しました。内容も好評でした。海外からの参加者からこれほど内容が充実した国際会議を市民たちが企画し実践する姿に驚いたとの声が聞かれました。

3日は自由発表に当てられ、13名の発表がありました。防災に雨水を利用する提案あり、路地尊をめぐる下町コミュニティの分析あり、洪水に備えた貯水のあり方あり、京都・東本願寺の雨水利用から雨と心の問題についての語りあり、などバラエティに富んだものでした。

水危機打開に向けた布石が打たれた

5日のメインフォーラムは、広い会場が熱気で包まれ、ほぼ満席となりました。まず、第三世界水管理センター所長、アシット・K・ピスワス氏が基調講演をしました。国際的に雨水利用がもっと評価を受けるべきであり、そのための国際的な雨水管理センター設立に墨田区がリーダーをとるべきだと熱いメッセージを述べられました。

また、雨水東京国際会議実行委員会の会長である当会の辰濃和男会長が、基調報告をしました。1994年に開催された「雨水利用東京国際会議」から11年間に何が変わったか、これからわれわれが何をしなければならないかを語り、「命の源である雨を無駄にしてはいけない、汚してはいけない」と、心に沁み入る言葉が印象的

でした(2~3ページに詳細掲載)。

次に、東京大学名誉教授である高橋裕氏が座長を務める国際雨水サミットが行われました。国連環境計画国際環境技術センターのピセンテ・サンティアゴ氏、国際雨水資源化学会会長のジェシカ・サラス氏、ドイツfbr副会長のクラウス・ケーニツヒ氏、辰濃和男会長、日本下水道文化研究会代表の酒井彰氏、国土交通省水資源部長の仁井正夫氏、そして山崎昇墨田区長、7名がスピーチをしました。身近な雨をいかに利用し共存するかは、国際的水危機の解消にとって重要課題であり、雨水利用の普及をもっと進める必要があること、また、衛生問題を同時に取り組む必要があることなどが討議されました。雨は絶えず人と関わりを持ち、文化を育んできた存在です。雨を大切に思う心を次世代に引き継いでいきたいということは、各氏の共通の思いのようでした。

8分科会から東京宣言を世界へ発信！

6日(一部5日)は8つの分科会で議論がなされ、それらを受けて全体会では「雨水東京国際会議・東京宣言」が採択されました。この国際会議を中心的に企画運営した村瀬事務局長が9名の若者ととも10の課題を宣言し、最後に”No more tanks for war, tanks for peace!”を唱和しました。

目次

- 2P: 辰濃和男国際会議実行委員会会長 基調報告要旨
- 4P~8P: 各分科会からの報告
- 4Pコラム: 「雨水生活をしよう」
展示コーナー / あまみず亭
- 6Pコラム: ちびっ子たちに好評!
雨の絵本ひろば
- 7Pコラム: 売り上げの一部をバン
グラデシュの雨水タンク普
及資金へ
- 8Pコラム: 雨の浮世絵の展示
- 9P: 雨水東京国際会議・東京
宣言
- 10P: 公開セミナー「雨の浮世
絵を愉しむ」報告 / 雨水と
対話しよう
- 11P: 風コーナー / 汗を流して
みんなでタンクを作っ
た! / 雨水探検隊、雨水田
んぼで稲刈り / 技術レポート:
ドイツのDINと雨水利用
- 12P: 公開セミナー募集!
「お天気博士が語る雨百景」
・国際シンポジウム「雨と共
生する水辺都市の再生」



学生たちが国際交流も兼ねて打ち水作戦！ 水はもちろん雨水

- 基調報告 - 2005年8月5日

日本における雨水利用の10年間の展開、及び今後の方向性

辰濃和男（雨水東京国際会議実行委員会会長）

心を静かにしてご覧になってください。この写真から何が見えてきますか。何が聴こえてきますか。森にすむ妖怪の目玉かなと思う人もいるでしょう。雨の雫が落ちるときの、かすかな、本当に微かな響きが聴こえてくるという人もいるでしょう。雨の雫の音に、森の沈黙を思う人もいるでしょう。手のひらに受けて飲んでみたいと思う人もいるでしょう。世界の水危機の悲惨さが見えてくる人もいるでしょう。

「きれいな水ほどきれいなものはない」と歌ったのは沖縄の詩人、新屋敷幸繁ですが、私はこの写真を見て、この言葉を思い出しました。

私たちの運動はたえず、雨水のこの美しさに感動する心を出発点にしたいと私は思っています。この地球上で、本来、雨の一滴ほど美しいものはないのです。残念ながら、大気汚染の影響で雨が汚されています。同時に、この地球上で、雨の一滴ほど命のみなざるものはないのです。残念ながら、私たちはその大切な雨の一滴をむだにしているのです。

日本には、水神様を祀る聖なる場所が全国にあります。こういう場所には清らかな湧き水があります。私たちの先祖は、水こそがあらゆる生きものの命の源であり、同時にすべての穢れを清める力を持った存在だと信じていたからです。

水は万物の母であり、同時に、命ある存在です。命そのものです。さきほどの沖縄の詩人はこうも歌っています。「いのちというものはどこにもある。そのなかで一ばんゆたかにあるのは水の中である」

雨には命がある。雨は万物の命を生む。雨があるからこそ万物は生きつづけています。もしも、雨がなければ、地球は滅びます。その命の源である雨をムダに下水に流し、本来、清らかである雨を汚染させているという人類の罪を実感しなければなりません。

11年前の1994年8月、私たちはこの墨田区の、この場所で「雨水利用東京国際会議」を開きました。きょうの国際会議では「雨水利用」から「利用」の文字が消えています。ひとことでいえば、雨という天の恵みを大切に思う気持ちがいっそう深まってきたからだといえるでしょう。万物の命の源である雨を尊いものと思う心が深まったからです。尊いものに利用という言葉は似合いません。

1995年1月、阪神大震災が発生しました。私たち市民の会は、百基ほどの雨水タンクを贈呈し、被災者に喜ばれました。雨水貯留が災害時に役立つということも学びました。各地方自治体の雨水タンクに対する助成制度がふえ、ひろがっていきました。しかし、その数はまだまだです。

一方、大きなビルの雨水貯留はふえました。1970年代は東京のビル、巨大建造物の雨水貯留は数えるほどでした。それが2003年には1000件になっています。それだけ雨水タンクの普及は進んでいるのです。

東京ドーム、大阪ドーム、名古屋ドームなど、各地に誕生した巨大なスポーツ施設は地下に雨水貯留施設を設けるようになりました。私たちの調べでは、その数は17に及んでいます。名古屋ドームは2800トン、



(写真提供 鏑山英次氏)

福岡ドームは2900トンのタンクを備えています。お隣の韓国でもドームの雨水貯留は進んでいます。北京オリンピックは施設に雨水貯留のシステムを作るといふ話を聞きました。

1997年、沖縄で「雨水フェア in おきなわ」がありました。大会参加者の一人が報告していました。「私の家は70年前に18トンの雨水タンクを造って、いまでもそれを利用している。十数年前に新たに30トンのタンクを造った。親子三代、雨水タンクを誇りにしている」という報告でした。沖縄は頑張っています。

「2001雨水セミナー in 高松」が行われました。沖縄市も高松市も異常渇水で苦しめられた苦い経験を持つ地域で、それだけに、雨水貯留には、熱が入っていました。高松では、大型ビル建設のときは、節水・循環型の水利用計画の提出を義務付け、雨水貯留に対しては、助成を行っています。

家庭での雨水貯留は、70年代から徐々にひろまってきました。これから始まる国際雨水サミットの座長をお願いしている高橋裕さんは、1985年、自宅に雨水貯留プラス浸透の施設を造りました。先駆的な試みでした。特筆したいのは、高橋さんは、2トンの貯留装置だけでなく、屋根に降る雨水の半分は庭に浸透させるという仕組みを造られたことで、ここに先見の明があったと私は思います。お宅におうかがいしたとき、高橋さんは「雨水タンクのおかげで自然に近づくことができました」といわれました。そうです。わたしもそうでした。タンクを自分の家におくことは、雨とのつきあいを深めることです。雨をためることの楽しさ、雨とつきあうことの大切さ、それを教えてくれるのは、雨水タンクです。

その後、技術は進歩し、私たちの仲間である安藤勝治さんが雨水と水道をバルブで簡単に切り替える装置を開発しました。そのおかげで、我が家では、雨の多い月の場合は、4割近く水道料金を安く抑えることができました。

私たちは安くて手軽にできる雨水タンクをという要請にこたえて、60リットルほどのポリタンクを使った雨水タンクの普及を試みています。今年は、たとえば、墨田区の文花子育て相談センターでポリタンク9個をつなぎ合わせて、1トンに近い容量のものを作るといった仕事をして、土地の人に歓迎されています。いいタンクをより安く、というのは私たちの目指す雨水運動の最も基本にあるものです。

貯留だけでなく、雨を大地に浸透させる仕事が大仕事だということは、いうまでもありません。新潟市は、この浸透事業をひろめている地方自治体として有名です。この5年間で、宅地内での雨水浸透柵の設置は38,274基。この浸透柵による雨水抑制量は、61,283

m³になっています。新潟市も頑張っています。

1994年に出版され、版を重ねている『やってみよう雨水利用』という本が、中国、韓国、ベトナムなど9カ国の言葉に翻訳されました。それだけ世界の人々の間で雨水についての関心が高まってきたのです。

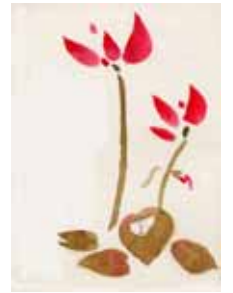
2001年、雨水市民の会は、メンバーが力をあわせて『雨の事典』を出版しました。この本は、一人、二人の力ではなくて、夢の実現のためにみなぎ力を合わせて創りあげたものです。すでに3版をかさねています。

その前年の2000年には、墨田区内に「雨水資料館」が誕生しました。将来は国際雨水センターを造り、雨水に関するあらゆる世界の情報の受信発信基地を造りたい、というのが私たち市民の願いです。

バングラデシュでは地下水のヒ素汚染が重大な問題になり、地下水を飲む人々に重大な健康障害を起こしています。地下水がヒ素で汚染されているなら、雨水に頼むのがいちばんです。雨水市民の会の仲間たちは、現地に飛び、安い雨水タンクをひろめるにはどうしたらいいかを模索してきました。ようやく、コンクリートのリングを重ねる比較的安いタンクを造る方法が軌道に乗り出しました。バングラデシュに自生する竹を素材にして雨樋を作る工夫も行われています。これからは、バングラデシュだけでなく、インド、ネパールなども地下水ヒ素汚染が問題になるおそれがあるといわれています。そういう意味でも、アジアでの雨水タンク普及は極めて緊急性を持った課題なのです。

雨水資料館にあるスリランカの雨水タンクには、「問題は水、解決は雨水」という言葉が書かれています。問題は山積みしています。温暖化と関係があるのか、日本にも熱帯型の短時間集中豪雨が増えています。都市型洪水の危険性が叫ばれています。なによりも、いまのままでは、世界の人口増に飲料水供給がついていけないという深刻な問題があります。解決は雨水しかありません。より早く、より大量の雨水タンクを緊急に普及させること、それが恐れられている水戦争を防ぐ最良の手段です。ひとりでも多くの人を救うために、ひとつでも多くの雨水タンク。それが私たちの願いです。

そのために、私たちが掲げているスローガンは次の言葉です。'NO MORE TANKS FOR WAR, TANKS FOR PEACE' 戦争のためのタンクはもうたくさんだ、平和のためのタンク、つまりひとつでも多くの雨水タンクを人びとに。それが私たちのスローガンです。



各分科会からの報告

分科会1 安全な飲み水としての雨水

バングラデシュのアジャール・アリ・プラマニク氏とモスタファ・ヌルツァマン氏が、地下水ヒ素汚染及び塩害の現状とその対策として飲み水確保のため雨水タンクの普及をしている活動について報告しました。スリランカからは、タニユジャ・アリアナダ氏が津波の被害状況と復興計画で雨水利用を進めていることを発表しました。日本からは、徳永暢男副会長が普段からのまちづくりと災害時にも役立つ雨水利用について、地元墨田区の事例を報告しました。オーストラリアからジェナ・キャロル氏が全ての水を雨水で賄っている「雨水生活」を報告しました。また、会場からはJICAの職員が世界中で安全な飲み水の確保が危機に瀕している状況を報告したり、建築の専門家から家庭での雨水利用設備の導入について発言がありました。

このように世界中の雨水の話を知っていると、日本で「雨水は飲み水として安全なのか」と考えていること自体が、とてもちぐはぐな疑問であるように思えてきました。(今関久和)



浴衣姿で少し緊張気味のボランティアの子どもたち



雨水をろ過するにも、つい力が入って夢中になる

「雨水生活をしよう」展示コーナー

安全な飲み水としての雨水は、スカイウォーターをキーワードとした今回の会議の中でも重要な主張のひとつでした。分科会では、海外の水問題支援だけでなく、日常的な私たちの生活でも雨水を飲むことについて議論しました。そして、飲用に限らず、災害時にもあわてない生活をしよう、ということが雨水生活班の目標になりました。

展示の構成は、雨水ってどんな水だろう、雨水を使ってみよう、雨水から飲み水をつくってみよう、雨水を飲んでみよう、あまみず亭、と大きく5つとなりました。展示内容では、酸性雨などで汚れていると思われる雨水が、実は他の水に比べてはるかにきれいであることや石鹸の泡立ちが雨水と水道水では大きく違うことなどを示しました。自転車やシーソーなどでろ過する装置は子供たちに人気でした。タスマニアの雨のペットボトルは他の水と飲み比べて雨の味を実感できたと思います。あまみず亭のお茶も大人気でした。

展示コーナーには多くの方が訪れ、たくさん意見を交わすことができ、大きな収穫でした。

雨水生活班は引き続き活動を続けており、10月6、7日の両日開かれた韓国の雨水ワークショップにも参加してミニ展示を行いました。(神谷 博)

あまみず亭

直前にNHKテレビ「おはよう日本」で取り上げられたことで反応も良く、約930人の方々にハーブティ、お茶、そして墨田銘店名品会からのご好意で特別に提供されたお菓子をサービスしました。

発足当初は、メンバーの間で「逆浸透膜方式」云々の言葉が耳新しく、自分は門外漢だと不安でしたが、席持として若い人たちに雨水に関心を持ってもらうため絞って呼びかけました。幸いにも、趣旨に賛同し、協力をしていただいた小、中、高校とその指南の先生方のご尽力には心から感謝する次第です。また、快く水運びをしてくれたソウル大学の学生諸君や都内のボランティアの皆さんにもお礼を申し上げます。

難しいことはともかく、雨水がどんなものかを、とても分かりやすく参加者に納得していただけたと思います。(今泉壽枝)

分科会2 雨水の貯留・浸透と活用技術

出席者は約50名と用意した資料が無くなるほどの盛況でした。

最初に、熊本市環境保全課の山内勇氏より、「地域の水循環と保全」をテーマに、熊本市の水道の水源はすべて地下水であること、その地下水の涵養に水田が深く関わっていることなどが報告されました。続いて、雨水市民の会の安藤勝治氏より、「誰にでも出来る雨水利用」をテーマに、雨樋からの集水と貯留について多くの事例が紹介され、貯留することで水質の改善が図られ、黄砂・火山灰を含んだ雨水対策にも有効であることが報告されました。続いて、雨水流出抑制技術協会の中谷耕太郎氏より、「千葉県八千代市宅地開発の事例報告」をテーマに、16棟の分譲地すべてに雨水貯留と浸透システムを採用したところ、地下浸透機能により完全な流出抑制が実現し、貯留した雨水の約半分は、生活雑用水として散水・洗濯に有効に利用されていることが報告されました。

事例報告の後、質疑応答により、雨水の貯留・浸透と活用技術の理解を深めて分科会を終了しました。

(中山博文)



雨水ハウスとバン格拉デシュのリングタンクのモデル

分科会3 雨を捨てない保水型都市へ

保水型都市分科会では、海外からの2名を含む6名のパネリストをお迎えし、「雨を捨てない」行動を根付かせるために何が必要かを議論しました。約130名の参加がありました。

“乾いた都市”の弊害、都市型水害を軽減するため、都市にもっとスローな水循環を形成する、そのためには、足元に降った雨から対応することが必要です。都市気候の異変についての報告、日本と韓国から地域や流域において市民と行政が一体となった活動が報告されました。そして、雨水排水より課徴金を徴収しているドイツがなぜそうした制度を作り上げたのか、日本の法制度の動きや今の制度でも市民の行動を促すさまざまなインセンティブが考えられるという報告・提案がありました。

個人が所有する雨水浸透、雨水貯留からはじめて、面的に都市の水循環を管理する方向へどのように展開していくのか、そのベースには、市民一人ひとりがスローな水循環に合意することと、負担の方法など、各主体の参加形態がこれまでとは大きく異なる雨水管理システムを支えるさまざまな仕組みが必要だということが議論されました。次の段階では、保水型都市のケーススタディを行いたいと考えています。

(酒井 彰)



うるおい広場ではいろいろな雨水タンクや浸透樹などが展示された



すみだリバーサイドホール・ギャラリーでは、60題近くのポスターや「雨の書道展」が展示された。写真は、8月4日に行われたポスターセッションの様子

分科会4 雨の環境学習～雨水に学ぼう！

雨の環境学習分科会は、すみだ環境ふれあい館で2つの部会を同時進行しました。一つは子どもたちの体験型学習を中心に行いました。30名ほどの小学生が参加、午前中は環境衛生監視員の人見達雄氏の水の知恵の話と気象キャスター原田龍彦が雲や雨の話を。午後前半は、広島商船高専助教授の岐美宗氏と同校の生徒6名で酸性雨測定の体験授業が行われ、後半は、岐阜県立サイエンスワールドの溝口喜久氏により自動車の排気ガスから酸性雨を作る実験が行われ、生徒たちを驚かせました。

もう一つは、午前中は教育関係者を対象に、千葉大学教育学部講師の笠井守氏が、数年をかけた小学生の雨の授業の取り組みを報告。午後は、インドのレインセンター所長のシェイカー・ラガヴァン氏が都市部の雨水採取などについて、また佐原滋元氏は墨田区の一寺言問地区を防災の町にする取り組みについて話しました。

「古来・日本人が育んできた、雨を大切に作る町、くらし、文化を次代に伝えていくことが大切と考え、雨の体験学習を通して、豊かな感性と雨の文化を育み、足元の文化も大切に作る人を育てよう。」をまとめとして全体会議で報告しました。 (原田龍彦)

分科会5 雨水を活かした緑豊かなまちづくり

市民・行政・企業・大学が、いい意味での緊張関係を保ちながら、それぞれのパートを歌い上げると素敵なハーモニーが生まれます。まちづくりを音楽の構造から読み解くことにより、その多様性と奥行の深さへの理解が深まるだけではなく、俯瞰した新たな関係性、可能性が見えてきました。後半の討論会の中で、西河哲也氏(ひとまちCDC)が五線紙の上にまとめてくださったチャートが、分科会が求めている輪郭のようなものを示していました。

様々な角度からまちづくりを実践しておられる7人のパネリストを迎え、小さな点から面に広がっていく活動やネットワーク、足元の雨水を大切にすることから広がる緑豊かなまち、キーワードは繋がりを見せました。

【講演から一言抜粋】1) 緑をまちづくりの道具としてではなく、パートナーとして共存すること。2) 緑視率(統計化された緑被率ではなく)の重要性と路地園芸と雨水の関係。3) 屋上緑化の効果と材料の進化にともなう緑化技術の高度化。4) 市民活動30年に及ぶ川の再生と雨水浸透柵の設置。5) JR高架線の緑化を含め、沿線の学生と市民の交流を図りながら実践されている事例。6) 23年前から市民が川に関心をもってくれるよう、ゲリラ的にイベントを仕掛け、トンボ池作りなども子供たちを取り込みながら輪が広がっていったお話。 (松本正毅)

ちびっ子たちに好評！雨の絵本ひろば

絵本の前に立ってしまうと手を伸ばさずにはいられなくなります。雨の絵本ひろばの小さいすに腰掛け、絵本を読むのに没頭している人が何人もいました。意外に大人の方がはまっていたりして…。

そんな中、お母さんに連れられ、ちびっ子達も遊びに来ました。「お姉さんと一緒に絵本読もうか」と声をかけると、子ども達は人見知りしながらも自分の読みたい本を差し出しました。

「あめだからあえる」。色々な虫や動物がたくさん出てきます。子ども達も、ページをめくるたびに目がどんどん輝いてき

て、本にのめり込むように前に迫ってきます。「かえるさんはどこにいるかな？」と聞くと、「ここ!!」「こっちにもいるよ!」「小さいかえるさん見つけた!」といつせいに指をさします。さっきまでの人見知りで恥ずかしがり屋さんたちはどこに行ったのでしょうか?あまりの勢いに、こちらが押されてしまうほどでした。

キラキラした子どもの目がとても印象に残っています。絵本には、大人も子どもも夢中にさせる、不思議な力があるんですね。(南 ゆう子・ボランティア)



分科会6 水循環を活かす農業～棚田やため池に学ぶ

どのような催しも企画、実施、評価の過程でかわった人々の「人間模様」を映します。濃淡の差はあっても、情と知がふれあって、織り成す模様・・・。

当初、10名(女性4名、男性6名)が賛同し、実行委員会に参加。侃々諤々の論議を重ねていくうちに4名が離脱したが、遺してくださった模様を活かし、香川用水土地改良区相談役・長町博さんの「ため池文化を守ろう」につなげ、試練を克服しつつ実施へ。

総合司会に最年少20歳の池田ゆかさん(「ATT」編集長)を起用。現場に学ぶ姿勢で、旧山古志村の棚田復興者・青木幸七さんを訪ねて、「なぜ震災に負けずに棚田を復興するのか」など実施プランを練り上げていく、あふれる若さ。だが、若さだけでは熟した模様を描けない。老成した渋みを塗ったのが大崎正治さん。フィリピンの先住民マリコン村のジェフリー・ポーセンさんの招聘に尽力いただいて、「伝統的な灌漑と棚田づくりの手法」を報告してもらえた。更に栃木県で有機稲作技術の確立に励む館野廣幸さんの実践報告があり、人間賛歌の模様を彩りを深めた分科会であったでしょう。(矢間秀次郎・ATT流域研究所)

分科会7 緑のダム～雨水利用から考える水源の自立

脱ダムをめざす市民の「緑のダム」へ寄せる期待がいかに大きいかをうかがわせる集会となりました。

まず、座長の藤原信氏(宇都宮大学名誉教授)から「都市にも雨を活かして緑のダムを創出しよう」という問題提起。次に、片倉正行氏(森林と水プロジェクト)が、森林を維持していくため長野県が針葉樹と広葉樹の混交林造成に移行していることを述べました。そして吉野川の流域プロジェクトの姫野雅義氏は、緑のダムの検証実験について報告、洪水を防ぐには森林の手入れこそ重要として、「緑のダム」づくりを地域再生事業の「要」にするべきだと主張されました。

韓国からはキョンロク・イエ氏(東大客員研究員)が首都ソウルのめざましい緑の街づくりの成果を紹介しました。アシット・K・ビスワス氏(第三世界水管理センター所長)は世界的にはダム不要論では水の確保が難しい所もあるとのことでした。

会場との議論では、「森林の整備によりダムは不要とする主張は森林の過大評価ではないか」に始まり、多摩川水害訴訟の評価やバイオントダム事故の原因などにまで及びました。また、「緑のダムというと、樹木を植えることだと誤解されていないか。日本の森林は間伐などの手入れができていない林業政策のあり方こそ問題なのだ」という蔵治光一郎氏(東大講師)のアドバイスは印象深かったです。(田中清子)

書籍・グッズコーナー

売上げの一部をバングラデシュの雨水タンク普及資金へ

8月1日から6日まで、リバーサイドホールホワイエで、バングラデシュの麦わらハンディクラフト・カードや、雨水や環境に関する書籍・CD、Tシャツを販売し、売上げは50万円を超えました。

ハンディクラフト・カードは、バングラデシュの女性たちが、麦わらを切絵のように貼って作ったものです。グリーティングカードと、雨水タンクが飛び出す立体カードの二種類があり、会議の参加者に好評でした。この売上金は現地での雨水タンクの普及に役立てられます。

販売コーナーでも、ちょっとした国際交流がありました。韓国語訳「やってみよう雨水利用」を、韓国からいらっしゃったキムさん(高陽市の女性市議)などの依頼で販売しました。その売上金(7000円)は、全額を実行委員会にカンパしていただきました。丁寧に礼を言って、ありがたく頂戴しました。

オーストラリアのジェナ・キャロルさんからは、自身の雨水生活を記録した書籍“Doing the Dream”の販売を依頼され、喜んでお引き受けしました。

販売コーナーの書籍をご覧になった高橋裕さん(東京大学名誉教授)からは、「ここには『雨の事典』(レインドロップス編)の英訳版がありませんね。国際会議なのだから置いたほうが良いのでは？」とアドバイスをいただき、あわてて区役所の方から借りて販売するという一幕もありました。

(長尾愛一郎)



分科会8 これからのアジアの雨～その量と質はどうなるか

この分科会は2つのセッションを開催しました。雨水への理解を深めるための専門家による講演会では、山梨大学の竹内邦良氏(「温暖化により東南・東アジアの降水量も増えるというが?」)、気象キャスターネットワークの村山貢司氏(「温暖化と異常気象」)、江戸川大学の土器屋由紀子氏(「雨には何が含まれているか(降水の化学の話)」)の3者から、分かりやすいお話を伺う事ができました。一方翌日は、中国、スリランカ、ネパールなど6カ国の留学生から母国における水事情を紹介しあい、相互理解を深めるとともに、この分野に残されている研究テーマを考えました。

このように“学”からの参加を表に出しての企画でした。それは“雨水利用”というテーマに対しても、“産官学民”の協力が非常に重要であると考えているからです。“学”が担う“研究”にはじっくりと遠くを見据えた面白さがあります。

気象や水文や水質の分野で日本の若者が世界に向けた先駆的な仕事をしていくこと、それが雨水利用の活動にも深く関わってくることを理解してほしい、それがメッセージです。(風間ふたば・山梨大学)



お知らせ

- 1 雨水東京国際会議の収録ビデオを作りました。希望の方へお分けできます(実費+郵送料)。ご希望の方は事務局へFAXまたはメールにてお知らせください。
- 2 正式な報告書は12月以降に作成予定です。

雨の浮世絵の展示

メイン会場の舞台両サイドには大きく引き伸ばした北斎の雨の日のスケッチ、両壁面には額入りで、これも雨の浮世絵ばかり78点を展示。日本で開催する「雨の国際会議」にふさわしいセッティングでした。

雨を描いた浮世絵がこんなにたくさんあったとは! そんな声がずいぶん聞かれましたが、日本でもおそらく史上初の展示です。

額縁の代金として、一点4,000円で希望者に買っていただくことにしました。残ったら収納場所に困るなあ、と思っていたところ、何と1人で20点買って下さった方もいて、開催期間に50点、残りも9月中旬に完売しました。

売り場で印象深かったのはスリランカの女性です。「もっと小さいのはないのか」などと言いながら、何度も来られては考えています。遅ればせながら、ハッと気がついて、自宅にあったコピーを4、5枚持ってきて差し上げたところ、飛び上がるように喜んでお

られました。額入りではスリランカまで持って帰りにくいですがね。

そんなちょっとした交流が出来たのは、全て傍にいた若田さんの通訳のおかげ。海外からの人たちにも気軽に助け船を出してくれて、みんな明るい顔になるのが印象的でした。(糸賀幸子)



メイン会場に飾られた雨の浮世絵

雨水東京国際会議・東京宣言

どうも雨の降り方がおかしい。東京だけでなく世界中の人々が気付き始めています。降れば洪水、降らねば渇水。21世紀は、気候変動の影響により洪水と渇水の振幅が激しくなると考えられています。大洪水と大干ばつは食の危機を引き起こし、将来、水と食の戦争さえ心配されています。また、現在世界で11億人もの人たちが安全な飲み水を確保できていません。国連は、今後10年間でその人口を半減するというミレニアム開発目標を掲げていますが、いまだにその具体的なシナリオは書けていません。加えてトイレなき人口が現在世界で24億人もいると言われています。水と衛生の問題は21世紀における持続可能な社会の実現の鍵を握っているといっても過言ではありません。それはまた、スマトラ沖大地震のような大規模な自然災害で被災した地域における災害復興の中心課題にもなっています。大洪水、大渇水そして大地震にどのように立

ち向かっていくのか、今、私たちに新たな水の危機管理が求められているのではないのでしょうか。

世界の多くの都市では上下水道が普及し、とても暮らしが便利になりました。しかしその反面、雨が身近な暮らしから遠ざかってしまったのではないのでしょうか。いつしか、人々は雨を迷惑なモノと思い込み、自分たちが雨によって生かされていることに気づかなくなり、雨に親しむことも、心から感謝することもなくなってしまいました。しかし、それは間違いでした。雨は天の恵みです。万物の命の源です。雨は命ある存在です。そして雨は私たちの暮らしを支え、多様な文化を育む根源です。私たち雨水ネットワークは雨水先進都市すみだに集い、生命と文化育む雨の視点から水危機の本質に迫りその打開策を議論する中で、次のような結論に達しました。

1. 私たちは大地と空の間を循環している雨水をスカイウォーターと呼びます。スカイウォーターは誰もが手に入れられる安全な飲み水の水源です。私たちは、スカイウォーターを積極的に活用し、飲み水の危機を打開していきます。
2. 世界の空はつながっています。きれいな空にはきれいなスカイウォーターが降ります。私たちは、だれもがきれいな飲み水が得られるように、地球規模で大気汚染の防止に取り組み、きれいな雨を未来人に伝えていきます。
3. 私たちは、雨を排除しすぎて乾燥化してしまった都市を、雨水をため、地下にしみこませ、そして活用することによって、潤いのある「保水型都市」へ作り変えていきます。また、都市開発や建築設計の際にそのことが当たり前になるよう、社会制度や技術基準を作り上げていきます。
4. 私たちは、遠方のダムに全面依存するのではなく、節水を徹底し、雨水をたくわえ、水源の自立を目指します。また、給水をライフラインだけに頼るのではなく、雨水や地下水などの小規模で分散した水源をライフポイントとして計画的に地域に整備し、災害に強いまちを目指します。
5. 流域で水循環を再生し川に豊かな流れを取り戻していくことは、渇水と洪水を低減することになります。私たちは、そのために森林の整備と保全を強化する「緑のダム」づくりを推進します。
6. 私たちは、都市の水と土と緑を一体のものとして捉え、地域から雨を活かした緑豊かなまちづくりを推進します。
7. 私たちは、古来、人類が育んできた雨を大切に暮らし、文化を未来人に伝えていきます。また、雨の体験学習を通して豊かな感性を育み、未来の地域と地球の環境のことを考え、地域から地球的に行動する人を育てていきます。
8. 棚田やため池など先人の雨を活かす農業に学び、私たちは、水循環を活かした持続可能な農業を推進していきます。
9. 私たちは、アジア・太平洋のスカイウォーターネットワークの活動と交流の拠点を整備してアジアの水危機を打開し、雨と文化の問題を究めていきます。
10. 雨を活かして世界に平和を。8月6日は、広島に原爆が落ちた日です。私たちは決して黒い雨を忘れません。戦争のタンク(戦車)より、平和のタンク(雨のタンク)を。雨を分け合い、雨を活かして平和を守ります。
“No more tanks for war, tanks for peace!”
私たちは、世界に向けてここに高らかに宣言します。

2005年8月6日 雨水東京国際会議実行委員会

第1回 「雨の浮世絵を愉しむ」 報告

はじめに、日本における雨と文芸のデータベースを作るという「雨と文芸チーム」の活動と夏の国際会議での雨の浮世絵展示などの報告が、糸賀幸子さんからありました。続くどの報告にも、浮世絵などを色彩豊かに映し出すパワーポイントが活躍し、内容を盛り上げました。

また、休憩時間には、「栗時雨」などの雨にちなむ名前の菓子を食べながら、浮世絵を見るのも楽しいものでした。

江戸の天気(平沼洋司さん) 浮世絵が栄えたころの江戸は、小氷期にあり、かなり寒かった。その間、隅田川の氷結が3度もあり、天保や天明の飢饉もその時期に起こっている。

浮世絵の流れ(大庭克世さん) 菱川師宣に始まる浮世絵の起こり、鈴木春信、喜多川歌麿、歌川国貞といった美人画の変遷、雨乞小町や見立絵について紹介した。

北斎と広重(堀内和司さん) 北斎は広重より38歳も年上だが、北斎の「富嶽三十六景」や広重の「東

都名所」など互いに風景画で活躍した時期が重なる。北斎は理科系の頭脳で自己の造形世界を完成しようとし、広重は文科系的感性で写真のような風景を描いたという見方がある。

浮世絵にみる傘(原田稔さん) 蓑・笠から、雨皮、桐油紙(とうゆがみ)、雨羽織や合羽など、初めて知る雨具の系譜。雨具を身に付けるにも階級社会の差別があったなど興味深かった。

ゴッホとジャポニズム(松本真理子さん) 日本の浮世絵が印象派の絵画に与えた影響をそれぞれの原画と対比して示し、参加者から驚きの声が上がった。ゴッホは人物画の背景に浮世絵を盛んに描き、雨を直線で描いた「雨の風景」もある。

18名が参加し、以上の貴重な雨の文化情報・先人たちの遺産を、将来の雨水国際センターに集約し発信していこうという意見に、皆、賛同し盛会のうちに終わりました。(柴 早苗)

(10月15日(土)・すみだ環境ふれあい館にて・18名参加)

雨水と対話しよう

8月3日の自由発表で発表された延澤栄賢氏は、京都の真宗大谷派東本願寺で、雨水利用に取り組んでおられます。京都駅前の広大な東本願寺の境内地にある御影堂、阿弥陀堂は1896年に建てられ、特に前者は世界最大の木造建築物と言われています。110年の経過で、屋根瓦や木部に破損が生じ、修復工事にあたり雨水利用を取り入れました。取り組みの発端は、京都雨水の会から小さな雨水タンクを寄進されたことです。

御影堂の素屋根9,200㎡に降る雨を6tと100tのタンクにため、それぞれ瓦洗いと屋根散水・トイレ洗浄に利用。屋根散水は夏場の屋根温度を5~10度、室温を3度程度下げた効果があったそうです。また、東本願寺は全国にある真宗大谷派の8900もの寺院を包括する寺であり、修復現場の視察に大勢の人が訪れています。身近な雨に触れる瓦洗いなどから「忘れかけている雨の働き」を思い返し、「いのちの始まりとしての雨」を感得することができるのではないかと延澤氏は語りました。

生き物は水なしでは生きられません。水の源であ

る雨は、食糧生産や森をはぐくむことなど深く私たちのいのちとも関わっています。人間の体にも雨が循環し、雨により生かされているのです。「雨はいらぬが水はほしい」と勝手な思いでいる私たちの感覚は、「雨との対話」で、私という存在を貫くいのちの存在を確かめることができるでしょう。

思い返すと、日本文化の象徴である伝統木造建築物には、木や森が必要不可欠であり、環境とはもともと深い関係があるのではないのでしょうか。

(高橋朝子)





汗を流してみんなでタンクを作った!

雨水資料室の近くにある文花子育て相談センターが、以前から市民の会に雨水利用の相談をされていました。すでにポリタンクを企業から譲り受けておられ、国際会議に間に合わせるため手づくりタンクプロジェクトとタンクの取付けを一緒に行いました。

樋から「龍口」で集水して、9個のタンクを連結したあとに蛇口を付け、900リットルを溜めるタンクができました。しかし、地面が傾斜しているため、タンクが転倒する恐れがあり、L字型の架台を作ってタンクを載せ、フェンスで固定することにしました。会員の宗像さんに図面を描いてもらい、ふれあい館にあった鉄のフェンスを再利用して、会員の伊藤林さんの知人の板金屋さんに架台を作っていただきました。また、子育てセンターの職員、サポーターの黒崎さん、和田さん、タンクにお絵描きしてくれた子どもたちとお母さん方も、汗をかきかきみんなの力で完成しました。これを機に雨水利用を理解していただき、雨水を大事に使ってくれたらこの事業は大成功です。(高原純子)



慣れない手つきで鎌を使って稲を刈り取る雨水探検隊

雨水探検隊 雨水田んぼで稲刈り

10月8日(土) すみだ環境ふれあい館の田んぼで雨水探検隊の子供たち約30名が集まり、稲刈りを行いました。小さな田んぼは子どもたちが溢れるほどでしたが、世話役の荒川さんたちに指導され、安全のための靴下姿で田んぼに入りました。

この田んぼの水は、隣の自転車置き場の屋根から集めた雨水です。稲刈りの前は、台風の風で稲が傾いたり、大雨による増水で一部の稲穂が水に浸かるなどのアクシデントもありましたが、ふれあい館職員の方々の手厚い協力で事なきを得ました。収穫量は小さな稲の束が40から50束ほど、それでも試験的に作った昨年の2倍は収穫されています。この田んぼの隣の池は、トンボなどを集めるビオトープ(里山と田んぼの水循環体験コーナー)で、今年4月に整備したものです。

12月3日(土)には収穫祭を行います。(原田龍彦)

技術レポート



ドイツのDINと雨水利用

ドイツでは、雨水利用設備に工業規格(DIN)というものが規定されています。このDINは、2001年に制定された「ドイツの飲料水改正令(2003年1月発効)」に適合しており、誰でも雨水利用ができるようになりました。これまでは、家庭において雨水利用を行う際に、衛生面や水質に関する議論が繰り返され、誰もが安心して利用することができていなかったようです。

DIN1989は、第1部から第4部の構成となっており、2002年から2005年にかけて発行され、雨水利用設備についての規格が定義づけられました。(表1参照)技術的な基準が定義づけられたことによって、製造者には透明性を、利用者には信頼性を与えています。フィルター付貯水槽や遠隔操作機能付のポンプなどの雨水利用設備によって、設計、施工の経済性や安定性が確保されています。また、コンパクトな雨水利用設備は、性能の保証を明らかにし、メンテナンスも必要最小限となっています。DIN1989第1部において、雨水

表1 ドイツ規格 DIN1989 雨水利用設備

第1部 設計、施工 運営、メンテナンス	第2部 フィルター	第3部 貯水槽	第4部 操作ユニット 追加給水ユニット
発行 2002年4月	発行 2004年8月	発行 2003年8月	発行 2005年6月
設計・必要敷地面積・貯水槽・配管システム・水流停滞防止・メンテナンス	適用範囲・衛生的効果・フィルター効果・検査内容・種類	荷重・設計場所の安全性・縦坑の構造・防水性・配管との接続・品質保証	家庭用水の状態・追加給水バルブ・ホップ技術・操作
利用規格対象： 設計者	製品規格対象：製造者		

利用分野として指定されている庭の散水、トイレの洗浄、洗濯について、ドイツ市民誰もが安心して利用することが可能となりました。

日本では幾種類かの雨水利用マニュアルは作成されていますが、統一性や規格性といったものはなく、最新の技術に対応したものが確立されていない状況にあります。これからは、雨水利用の技術レベルの確保や設計者が安心して採用できる規格が必要のようです。今後、DIN1989についての更なる研究と、日本の気候風土を考慮した雨水統一規格について、早急に検討する必要があるのではないのでしょうか。(清水英弥)

あまみず公開セミナー **雨のおいしい話 最終募集!**

第4回 11月19日(土) 午後1:30 ~ 3:30

お天気博士が語る雨百景

講師：原田龍彦(気象予報士)

春と夏の間には梅雨、夏と秋の間には秋霖、冬と春や秋と冬の間にも、雨季はあります。雨の多い国日本では、沢山の名前で雨を呼び分けています。雨の情緒ある景色をみながら雨の話を楽しみましょう。

場所：すみだ環境ふれあい館・雨水資料室

参加費：会員 800円 非会員 1000円

(お茶と雨にちなんだお菓子付)

申込：事務局へFAX又はメールで申し込み

事務局 FAX:03-3611-0574

Eメール：office@skywater.jp

11月5日(土)午後1:30 ~ 3:30から同じ場所で徳永暢男さんが「雨水を飲み水に - バングラデシュでの取り組み」のお話をします。都合がつか方は予約なしでもいらっしゃってください。*

国際会議の飲み水分科会のメンバーが中心になって企画しています。

申込先：法政大学地域デザイン研究所・水辺再生シボジウム事務局 E-mail: eco-history@k.hosei.ac.jp

(名前、所属を記入、メールのみにて受付)

国際シンポジウム 雨と共生する水辺都市の再生

第一部...11月26日(土)日本建築会館301会議室
13:00 ~ 18:00/ 定員 50名

「雨と人・各国の暮らし今昔」 話題提供(13:10 ~ 14:50)「タイにおける雨の恵み」岩城孝信(タイ・チュロンコン大学) / 「ドイツにおける雨の生かし方」クラウス・ケーニツヒ(fbr 副会長) / 「韓国における雨水利用の歴史」ムーヨン・ハン(ソウル大学教授) / 「日本における雨と暮らし」鈴木信宏(東京理科大学教授) 講演(15:00 ~ 16:00)「歴史を変えた気候大変動」ブライアン・フェイガン(カリフォルニア大学名誉教授) パネルディスカッション「雨と共に暮らすには」(16:10 ~ 17:40)コトネーター：井上洋司(早稲田大学講師)「住宅で活かす雨水」黒岩哲彦(日本建築学会水環境運営委員)「雨でお洗濯」早坂悦子(東京洗剤工業社)「都市の雨水を飲むには」太田原茂樹(東洋紡エンジニアリング 主幹)「雨の環境教育」原田龍彦(気象キャスターネットワーク)

第二部...11月27日(日)法政大学市ヶ谷本校舎アクト7-26階
13:00 ~ 17:00/ 定員 150名

「雨と人・その恵みと災い」 研究報告「日本に降る雨の質と量」(10:10 ~ 11:50)「増加する集中豪雨と治水」佐藤寿延(国土交通省河川局) / 「首都圏の大気構造の変化」佐藤典人(法政大学教授) + 永保敏伸(法政大学助手) / 「雨を調べる」伊瀬洋昭(酸性雨調査研究会) / 「雨の中の微生物」矢口行雄(東京農業大学教授) 講演「雨と災害」(13:00 ~ 15:00)「巨大ハリケーンとミシシッピー川」ブライアン・フェイガン(カリフォルニア大学名誉教授) / 「スマトラ沖津波と飲料水の確保」スワタナ・タダニティ(チュロンコン大学助教授) パネルディスカッション「雨と共生する水辺都市の再生」(15:10 ~ 17:00)コトネーター：神谷博(法政大学講師) / 「バングラディッシュのスカイウォータープロジェクト」村瀬誠(雨水市民の会) / 「雨水利用とエコロジカルな都市づくり」クラウス・ケーニツヒ(fbr 副会長) / 「雨水法で改革する韓国の都市づくり」ムーヨン・ハン(ソウル大学教授) / 「水辺都市東京の住まい方」宮村忠(関東学院大学教授)



編集後記

虫たちが雨水を飲んで冬ごもりの備えをするという時期、「薬雨」。旧暦の10月の雨のことを言う。今、地震のあったパキスタンでは被災者を凍えらせる無情な雨が降っているという。「そこには食糧も水も薬もない」と医療関係者の声。合掌。(Morning)